

はるぴどんの丘

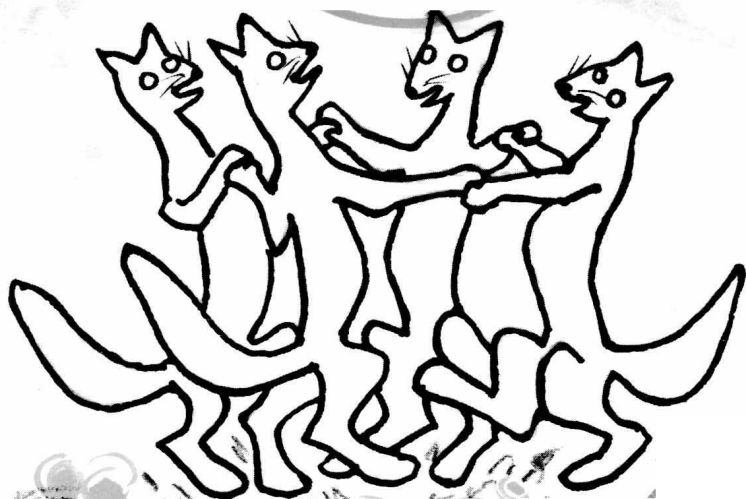
ていこ さく
矢田理子
さんぞう
金子三蔵 え



はるぴどんの丘

矢田^{ていこ}瑛子 さく
金子^{さんぞう}三蔵 え

筑摩書房



はるびどんの丘

913

175pp/23cm/A 5 判

一九七六年十二月十日 第一刷発行

著 者 矢 田 瑠 子

発行者 井 上 達 三

発行所 株式会社 筑 摩 書 房

〒一〇一九一

東京都千代田区神田小川町二一八

電話(〇三)二九一・七六五一

振替口座 東京六一四二二三

印刷 厚德社印刷・製本 協和製本

© 1976, T.YADA. Printed in Japan.

8093-88021-4604

も
く
じ

はるぴどんの丘へ^{おか}

こぎつねコンコ 6

四つ子のきょうだい 10

ふしぎな丘^{おか} 15

朝^{あさ}くらいうちに 21

まだまだ遠い^{とほ} 29

大山犬^{おおやまいぬ}に追^おわれて 34

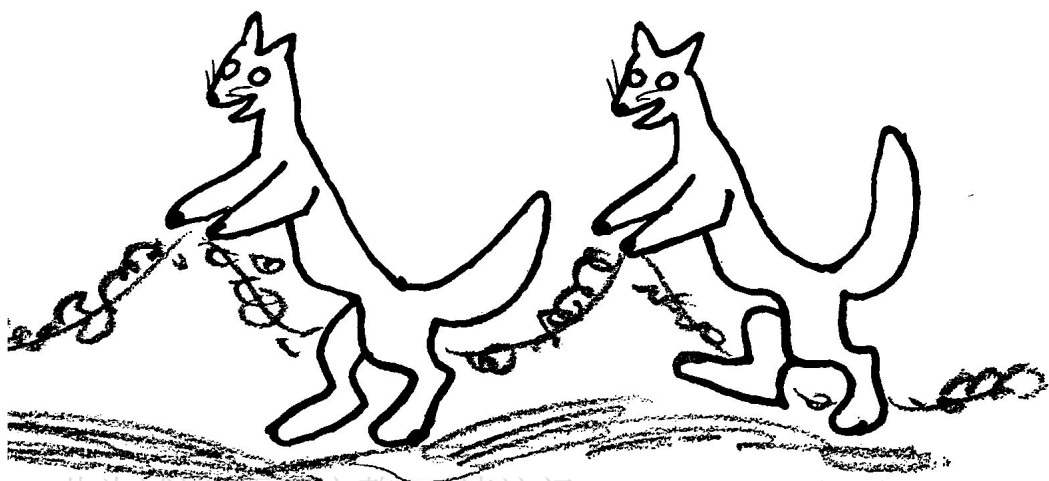
みんな、わかれわかれになつて

つらい旅^{たび}の終^おわりに 50

たのしいなかまたち

すばらしい朝^{あさ} 63

チャッケ・コンコーンズ探検隊^{たんけんたい}



はじめての冒険 78

ロープは ロープ 85

コンゾウが落ちた！ 91

消えたコンコとリーラ 103

宙づりになったチャッケ 107

さようなら、みんな！

ふしぎのくにの生きもの 117

コンゾウ！ たすけにいくぞ！ 125

おとうさんも、おかあさんも、うそつきだい！

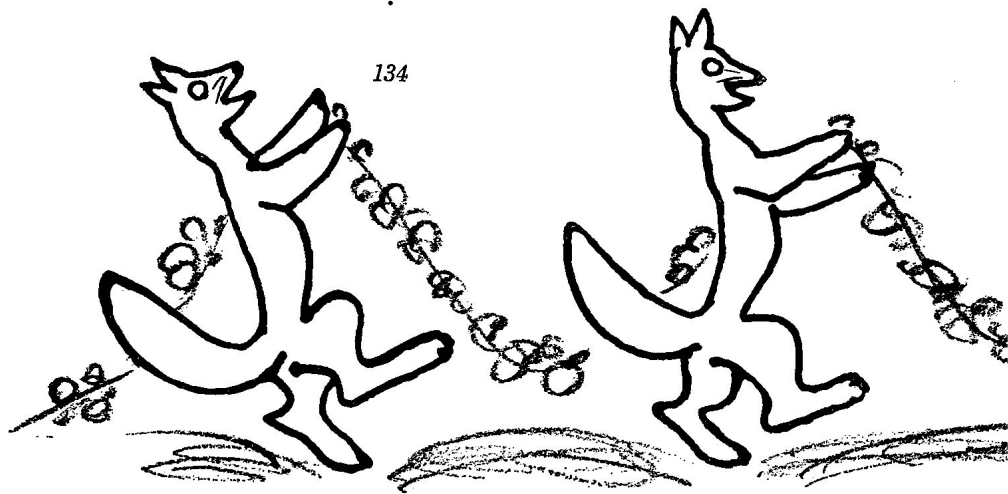
行ってしまったコンタ 139

ぼくたちもお別れだ 157

コンキチとチャッケまで！ 161

夕やけのはるびどん 167

134



は
る
び
ど
ん
の
丘^{おか}

はるぴどんの丘^{おか}へ

こぎつねコンコ

こぎつねコンコのおうちは、寒^{さむ}いさむい北^{きた}ぐにの山のなかにありました。

冬のあいだ、山はまっ白^{ゆき}い雪^{ゆき}にすっぽりうずまっていたましたが、春^{はる}の雨はひとりごとにあたたかくなつて、積^つもりに積^つもった雪^{ゆき}をとかしはじめました。

谷^{たに}の小川^{おがわ}は、みるみるうちに急流^{きゅうりゅう}となり、ゴーゴー音^{おと}をたててながれおちました。

木^こかげにきえのこっていた雪^{ゆき}も、とうとう、チロリチロリととけて、山^この小道^{みち}



をしつとりとぬらしました。

山の木々^{きぎ}はうすみどりの芽^めをふいて、まっ白い北^{きた}こぶしの花が、すんだ青空^{あおぞら}にばつとほころびました。

小鳥^{ことり}たちが、チュチュ チュチュ キキ キキ とにぎやかに歌^{うた}いだしました。おとうさんぎつねと、おかあさんぎつねが、いっしょうけんめいほったあなぐらのおうちの前^{まえ}のすなばにも、明^{あか}るい太陽^{たいよう}がふりそそいで、寒^{さむ}そうにぬれていたすなを、ふっくらとあたためてくれました。

コンコの山にも、とうとう春^{はる}がきたのです。

こぎつねコンコは四つ子の、ちいさな、いもうとぎつねでした。いちばんからだの大きなおにいさんがコンキチ、中のおにいさんがコンタ、小さいおにいさんがコンゾウといました。

四つ子のこぎつねは四ひきそろって、まるでそっくりのまあるい顔^{かお}をしていま

した。

おとうさんぎつねは、家のちかくの高いところのぼって、あたりをじっと見はっていました。かわいいこぎつねたちが、おなかをすかした森のけものにさわれないように、朝も晩もこどもをまもっているのです。

おかあさんぎつねは、朝くらいうちから、こどもたちのえさをさがして、山をかけまわっていました。

こぎつねたちは、いごちのよいあなぐらのなかで、ゆっくりおひるねをしたり、あたたかいすなばでころころがったり、とくみあいをして遊んでいました。

そして、おなかがすいてくると、あなの入口に、まあるい四つの顔をならべて、おかあさんの帰りを今かいまかと待つのです。

「コーン コーン」

おかあさんぎつねが、うれしそうにはねて帰ってきました。まるまるふとった野ねずみが四ひきもとれたので、おかあさんはうれしくてたまらないのです。



「ごはんですよ。おいしい、おいしいごはんですよ。クッ　クッ　クッ」
おかあさんの声こえがきこえると、こぎつねたちは、いっせいに走はしります。

あちらへヨチヨチ、こちらへヨタヨタ、おしあいへしあい、おいしいごちそうにとびつきました。

おかあさんのおちちも、ゴクリゴクリとのみました。

四つ子のきょうだい

やがて、こぶしの白い花びらが、はらはら、ちってゆきました。

から松まつのうすみどりが山をさわやかにいろどりはじめると、しらかばのちぢれた若葉わかばがきみどりのモザイクのように、チラチラ、青空あおぞらに光ひかりました。

まっかな山つつじが、いっせいにぱっとひらいて、山の春はるはまっさかりになりました。

四つ子のこぎつねたちは、ずんずん大きくなって、おかあさんぎつねが運はこんで

くれるえさでは、とてもたりないほどになりました。

おとうさんぎつねも見はりをやめて、遠くまでえさがしに出かけるようになりました。

こぎつねたちは、走ったり、とんだり、追っかけたり、むちゅうであそんでいました。

きょうは走りとびのきょうそうです。

コンキチがすすみ出て、いました。

「さあ、みんな！ おとうさんや、おかあさんみたいに、ピョン、ヒューン　つてとぶんだよ。

いちばーん、コンタクーん」

コンタは風を切って走ってくると、うしろ足で力いっぱい地面をけつてとびあがり、ヒューンと空中を切ってゆきました。

「わあー　うまい！　うまい！」

みんな、しっぽをバタバタさせてほめました。

「二ばーん、コンゾウクーん」

「はーい」

コンゾウは走りながら、むねをはってピョンととびあがると、しなやかなからだはスーイととんでいきました。

「すごい！　すごい！　ずいぶんとんだぞ！」

みんな、しっぽをふって感心しました。

「三ばーん、コンコチャーん」

「はーい」

コンコは、目をつぶって思いきりとびあがりました。

あたまを前につきだして、スーッと空を切ろうとしましたが、ポトンと音がして地面におちてしまいました。

「ぜんそくりよくで走るんだよ、コンコ」

「ピョンとかるくけりあげてごらん」

「ほら、よく見てごらん！」

にいさんぎつねたちは、口ぐちにいいながら、氣もちよさそうに目をほそめてとんで見せました。

コンコは、くりかえしくりかえし、力いっばい走ってきてはピョンととびあがりました。

けれども、コンコのからだは、すぐにポトンとおちてしまって、すこしも前へとばないのです。

「あーあ、つかれちゃった。もう、コンコ、いや！」

コンコは、フーツと息をはいて、ぺたんとすわりこんでしまいました。

「だめだよ、コンコ。ちゃんととべるようにならなくちゃ！ コンコだけにげられないよ！」

コンキチがいました。

「にげるって？」

コンコが目をまるくしてききました。

「ほら、おなががペコペコのけものが追っかけてきたら、とんでにげないと、さ

らわれて食^たべられちゃうって、おとうさんがいったでしょ！」

コンタがいました。

「食^たべられちゃったら、コンコどうする？」

コンゾウがいました。

「ひとりだけ、にげおくれたら？」

こわいけものにつかまってしまったら！

コンコが食^たべられてしまうなんて！」

コンコは、べそをかきながら、いっしょうけんめいとびつづけました。

いつ、かえってきたのでしょうか、おかあさんぎつねがそと、このようすを見^みていました。

「コーン コーン ただいま」

おかあさんぎつねがいました。

「みんな、とてもじょうずにとべるようになったのね。コンキチ、コンタ、コン